

■滝沢克己 宗教哲学者。独自の純粋神学を打出すも戦時中断、敗戦後は早くから大学問題を指摘、全共闘に応じ抗議退職。

たきざわかづみ

伊藤博文暗殺1909＝ 栃木県宇都宮で、長野県出身で漆器店営む商人滝沢佐市の第六子の三男に生まれる。母は操。

長野県出身ながら父の商売は順調で、地元の名士になっているという環境で、

さらに、弟妹も誕生するなか、すぐ上の兄嘉代嗣・姉富美子と遊びながら育つ。

21ヶ条要求・1915＝ 6歳：小学校入学。

本格政党内閣1918＝ 9歳：

兄嘉代嗣に続き、

大暴落・・・1920＝11歳：飛び級で、宇都宮中学に入学。地元では秀才兄弟と話題になる。

数学やゲームの神経衰弱には滅法強く、体育は苦手であったが、飛び級による世代のズレに悩み、

原敬首相暗殺1921＝12歳：生涯問い続けることになる奇妙な問いに取りつかれる。日露戦争後の若者の志向同様、陸軍士官学校予科

を受験するも、色盲が判明して断念、理科に進むことも諦め、

護憲三派圧勝1924＝15歳：また飛び級して第一高等学校文科に入学。世代間のズレはさらに拡大し、盲腸炎で病臥、

治安維持法・1925＝16歳：寮の晩餐会に来訪した芥川竜之介の講演を聞くなどするうち、奇妙な問いが心を占めるようになり、

金融恐慌・・・1927＝18歳：父の懇願で、東京帝国大学法科に進むも、まったくなじめず、退学し、

共産党事件・1928＝19歳：東大法科からは最も遠いところへと、九州帝国大学哲学科に入学。

図書館で、西田幾多郎の論文「無の自覚的限定」に出会って、若干の確信を抱くようになり、

満州事変・・・1931＝22歳：ユーヘンに関する大論文を書いて卒業、助手として研究室に入る。

五一五事件・1932＝23歳：長姉の縁で盛岡の小笠原とし子と出会い、結婚。

国際連盟脱退1933＝24歳：長男が誕生。*突然開眼し、西田哲学についての論文を書き、教授推薦で岩波{思想}に掲載され、西田本人

からも手紙があつて、哲学界にデビュー。フンボルト協会給費となり、妻子を盛岡に置いて、ドイツに留学

。西田に教えられたカール・バルトにも師事、その影響で神学研究に没頭、バルト推薦で

芥川直木賞始1935＝26歳：兄嘉代嗣が結核で死去。「信仰の可能性について」が{福音的神学}に掲載された後、帰国。助手となり、

二二六事件・1936＝27歳：「西田哲学の根本問題」。生活のためにと、NHK募集のドイツ向けアナウンサーを受けてパスしたが、

日中戦争始・1937＝28歳：二男が誕生。山口高等商業学校の哲学担当講師となり、

健保+総動員1938＝29歳：同校教授となる。自宅で読書会を開き、多数の学生が集まるとともに、影響も与えて行く。戦局進むなか、

第二次大戦始1939＝30歳：三男が誕生。中立的立場ながら、日本の戦争を聖戦と見て国体肯定発言をして行く。「現代日本の哲学」。

大政翼賛会・1940＝31歳：「現代日本哲学」。岳父が死去。

日米開戦・・・1941＝32歳：「カール・バルト研究」。宇都宮師団に召集されるが、身体的理由で、即解除。母操が死去。

・・・1942＝33歳：長女が誕生。学徒動員に付き添って、工場に赴き、

創価学会検挙1943＝34歳：特筆すべき「夏目漱石」。母校九州帝大講師にもなる。この年、山口高商から第1回学徒出陣、

年金+総武装1944＝35歳：次女比佐子が誕生。福岡では空襲後の悲慘を見、山口高商は山口経済専門学校となるも授業中止に至る。

敗戦・・・1945＝36歳：父佐市が死去。次々執筆出版するとともに、暮らしも激動。この年、西田幾多郎が死去。

新憲法公布・1946＝37歳：山口経済専門学校に復帰。「西田哲学の根本問題」「夏目漱石」を再刊。

新憲法施行・1947＝38歳：九州帝国大学法文学部哲学専任講師となり、単身赴任。

極東裁判決・1948＝39歳：助教授となり、一家で福岡に転居。

三大事件・・・1949＝40歳：西南学院教授を兼任。*早くも「教育二法案に反対する理由」で後の大学問題の一端を示す。

朝鮮戦争始・1950＝41歳：「デカルト”省察録”研究(上)」刊行。文学部教授に進む。

独立回復・・・1951＝42歳：

自衛隊発足・1954＝45歳：西南学院は退任。

それまで、神学研究しながら、キリスト信者になることを避けてきたが、

なべ底不況・1957＝48歳：愛弟子がオートバイ運転中、米軍の酔っ払い自動車に撥ねられて死去したことから、

インスタントマン・1958＝49歳：日本基督教団社家町教会で、妻とともに受洗。

タイタイ病始・1961＝52歳：*「大学の自治について」までに、大学問題ほとんどを発言。文学部長に就任すると、

TV宇宙中継始1963＝54歳：文部省相手に、九大文科系キャンパスの改築移転問題に要求を貫いて、

退任。この年の八木誠一「新約思想の成立」に共感的反論、以後、生涯”八木・滝沢論争”が続く。

大学紛争始・1965＝56歳：ドイツ福音主義教会連合の招聘で、渡独。バルトとも再会して、

いざなぎ景気1966＝57歳：帰国。九州大学基督教青年会理事長。

この間、始まった大学紛争に、学生側の視点で参画。

霞ヶ関ビルク・1968＝59歳：九州大学米軍戦闘機墜落炎上の処理をめぐる、断食企図。全共闘ピーク。この年、バルトが死去。

全共闘ビーク・1969＝60歳：60年からの全共闘先取りする論文集「大学革命の原点を求めて」。論文集化した代表作「”現代”への哲学的

思惟」。逃走中の全共闘議長山本義隆からの手紙に始まる往復書簡が{朝日ジャーナル}に公開されるや、一

躍全国に名を知られることとなる一方、大学では孤立化、

トルビョック・・・1971＝62歳：*定年を前に、抗議の退職。以後、全共闘裁判や{RADIX}編集など、運動の後始末に全力をかけていたが、

沖縄返還・・・1972＝63歳：「滝沢克己著作集」刊行始め、

石油ショック1973＝64歳：来るべき世界国家論じる「日本人の精神構造」を出版して、一段落すると、

角栄金脈辞任1974＝65歳：ドイツからの要請で、渡独し、エッセン大学客員教授ほか講演。

クランブル事件1975＝66歳：帰国。この年、八木が大著を刊行したことで、”八木・滝沢論争”が新たな展開。

JALハイジャック・1977＝68歳：マインツ大客員教授として、渡独。

成田衝突・・・1978＝69歳：帰国。末娘比佐子が癌で死去。

革新大敗北・1979＝70歳：エッセン大学客員教授として、渡独。眼病にかかると、

貿易摩擦問題1980＝71歳：追悼の「比佐子その生と死」を自費出版後、知人のすすめで、新興宗教{晴明教}道場に通り、

・・・1981＝72歳：手かざし治療を受けるうち、回復。以後、没するまで通って、視力を維持。この経験ふまえ、

中曽根内閣・1982＝73歳：

「バルトとマルクス」。

・・・1984＝75歳：「新興宗教の哲学」を執筆して、スキャンダル化し、出版断念。なお、聖書講義も続けていたが、

ハイデルベルク大学神学部から名誉博士号授与の知らせを聞くも、授与式前に、急性白血病で、没した。

前田保「滝沢克己」,